（様式２）

授 業 改 善 プ ラ ン

地域名	北総教育事務所	学校名	富里市立富里南中学校

１．課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

〇令和４年度全国学力・学習状況調査（６年生時）において、国語「記述式」の問題を解くこと、「読むこと」に課題がみられた。特に、「文章を読み、自分の知識や経験と結び付けて自分の考えを書く」ということに大きな課題がみられた。また、馴染みのない語句、概念が含まれた説明的文章のように長い文章の内容を読み解くことも課題であった。

２．取組のポイント（仮説、改善方法等）

〇研究主題を「内容を読み解き、自分の言葉で表現する力をつけさせるための工夫～主体的・対話的で深い学びの視点に立った活動を通して～」とし、仮説を「初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。」「授業や定期テストを通して長文を読み、その中から必要な語句同士をつなぎ合わせ、自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。」と立てて、授業改善を図っていくこととした。

３．具体的な実践

①理論研修

北総教育事務所 古川友行指導主事より「書くことが苦手な生徒への支援」について、講義を受け研修を行った。

②継続した「書く活動」の検討・実施

「書く活動」を年間通して継続的に行い、思考力・判断力・表現力につなげていくため、国語科の定期テストには毎回２００字作文を実施した。

道徳の感想文や美術の鑑賞文、行事後の振り返りシートを通して、学校全体で「書く活動」を継続して行った。

③少人数指導による読解演習・作文演習

教科書の単元とは別に、初見の文章を読み解く授業を設定した。

２００字の意見文を１０分で書く授業を定期的に行った。

④視写・速音読の実施

富里市で行っている「とみの国検定」を活用し、視写を行っている。

視写はインプットとアウトプットを繰り返すことで記憶力を向上させることができる。また、集中力も高まる。ＩＣＴ活用が推進される現代では、板書を書き写したり、メモをとったりすることに不慣れな生徒も多い。家庭学習として視写に取り組み、５分検定と１０分検定を使い分けながら調査を行った。速音読には脳を刺激する効果があると言われている。毎回授業開始時に、有名な文学作品の一部を１分程度で読み切れる量にし、タイムを計測する。

視写・速音読はいずれも、同じ内容を２～３度繰り返し行う。一度に捉えられる文の量が増え、馴染みのない言葉にも関心が高まることを目的としている。

４．成果

〇継続して「書く活動」に取り組むことによって、作文問題への抵抗がなくなってきた。

〇「意見文の書き方」や「根拠を明確にした文章の書き方」を少人数指導で学ぶことによって、書くことに自信がつき、「書いてみよう」と感じる生徒が増えた。

〇少人数指導によって、教師側も細かな添削ができた。生徒はお互いの作文を読み合い、表現を共有できた。

〇視写や速音読を継続して行うことで、文章を文字として捉えるのではなく、文や文章として捉えることができるようになった。

◆担当指導主事から（北総教育事務所　古川友行　指導主事より）

〇少人数指導によって生徒は「まず書いてみる」という意識が芽生えた。ひな型によって書きやすさが生まれ、抵抗なく書くことができるようになった。今後は教師側がヒントを減らしていき、生徒が自分の力で書けるようになったと感じる頻度を増やすことが効果的である。

良い見本を提示することや良い文章を共有することが「書く力」向上のポイントである。新聞のコラムや美しい言葉・表現ができた作品を見て、自分の手立てとさせることも大切である。